

何百年のブナの森

野堀嘉裕

鶴岡から高速バスに乗って仙台に向かう途中のことである。後ろの席に座った親子連れの子供たちが「スゴいなー、このブナの森の木はみんな何百年も生きているのかァー。ほんとにスゴイねー。」と喋っているのを聞いてシマッタと感じたのと同時にドキッとした。私はといえば、北村昌美先生の「森林と文化—シュバルツバルドの四季」を読み返していたのだ。この本は北村先生が鶴岡市の名誉市民になられたのを記念して復刻刊行した本である。私がシマッタと感じた理由は北村先生がよく言っていた言葉にある。冗談交じりで「森林学者なら乗り物に乗ったら本など読まずに車窓の景色を眺めるものだよ」と。

高速バスは山形自動車道の湯殿山インターチェンジから国道 112 号線の自動車専用道区間に降りて、左側には月山、右側には田麦俣集落が見えるあたりである。その子供たちはというとバスの窓ガラスにかじりつきながら、手前の緑豊かなブナ林と背後にそびえる月山の景色に見入っている。森林学者でもない子供たちが森の景色に熱中しているのに自分は本を読んでいたとは何事か、と心の中で自分を叱責した。一方、道路のすぐ傍には夏の盛りの陽光を受け、生命力の旺盛なブナ二次林が広がっているが、所々に植林されたスギやカラマツもある。ましてや、何百年も生きていたブナなどほとんどないことはわかっている。バスの車窓を眺める子供たちはブナの森の木々が何百年も生きていると、どのようにして思ったのだろうか。車窓の景色は確かにダイナミックだからスゴいなーと感じるのは当然なのだが、何百年も生きていたという発想はどのようにして生まれたのだろうか。子供たちにとって木というものはそもそも時間を超越した存在なのかもしれない。目の前のブナ林の妥当な樹齢を伝授して、子供たちの豊かな感受性を打ち砕く必要もないしその気もないが、子供たちが喋っていた「何百年」が気になって気になってしかたがない。ドキッとしたと同時に本を読み進むなど論外の心境に陥ってしまった。

その後、湯殿山トンネルを越えて月山第 1 トンネルに入るところには、子供たちは手持ちのゲーム機に熱中するようになっていたので、実は内心ホッとしたのだった。車窓の景色はブナ林の豊かな緑色から一変し、尾根筋のキタゴヨウの黒い樹冠と沢筋に爪で引っ掻いたような崩落の痕が見えるようになる。西川町からバスは再び山形自動車道に乗り、寒河江から山形に至る盆地の縁を進むが、景色の奥行きが感じられないのはなぜだろう。子供たちはこの景色をみて「何百

年」も生きてきたブナのことを思うのだろうか。北村先生が提唱された「森林文化都市」は群馬県沼田市、埼玉県飯能市との連携に発展しているし、市民の森林文化に対する関心も定着しつつある。ブナ林だけでなく森林文化都市が何百年と続くことを願うと同時に、今年 2012 年 8 月 13 日に 86 歳で永眠された鶴岡市名誉市民である北村先生のご冥福をお祈りいたします。



国道 112 号線湯殿山トンネル付近のブナ林